

浸水想定（洪水、内水）の作成のための
「想定最大外力（洪水、内水）の設定に係る技術検討会」（第 1 回）
議事要旨

日 時：平成 27 年 2 月 6 日（金）17:00～19:00

場 所：中央合同庁舎 2 号館 共用会議室 2A、2B

- 地域区分については全体的に妥当なものと思うが、クラスター分析に用いた指標について相関係数等を確認すること。
- 山間部で観測された降雨を下水道に適用することについて少し気になる。
- 台風性の降雨は地形による影響が大きいが、前線性のものはどこにでも降りうるものである。また、気候変動による影響の現れ方は異なる。このため、解析に用いた降雨の成因についてはチェックしておくほうがよい。
- 面積雨量の解析方法として 3 手法あるようだが、この方法による違いを示してほしい。
- 実績最大包絡線と、それぞれの流域での降雨との関係についてチェックしておくべきである。
- 「既往最大降雨からの設定」という言葉は誤解を招く恐れがあるので見直した方がよい。
- 年超過確率 1/1,000 が最大クラスであるという誤解を与えてはいけないので、最大クラスを想定して計算すると得られた結果がほぼ年超過確率 1/1,000 程度という結果なると捉えるほうがよい。
- 想定最大外力（洪水、内水）を設定するということからすると、最大となる降雨量だけでなく、最悪の事態をもたらすような降雨波形を選定することが必要ではないか。
- 引き伸ばし後の降雨波形が過大なものになった場合の修正について、例えば実績の最大降雨の包絡線を上回る場合には修正を行うといった方法が考えられる。

- この手法については、今後の降雨の状況を踏まえて適宜見直すことが重要である。
- 実績の降雨量を用いた設定方法についてだけでなく、今後、気候変動予測をどのように取り込んでいくのかについても具体的に示すことが望まれる。
- 浸水想定を作成するにあたって、森林の状況を含む流域の変化や、下水道の計算する際の河川水位の条件など、関連する境界条件などについても整理したほうがよい。
- 最大クラスを想定した対応だけでなく、施設的能力からそれを上回って最大クラスまで各段階で様々な外力を想定し、対応していく必要がある。また、最大の浸水想定だけでなく、時間的なものや、被害想定などを示すことも重要である。
- 想定最大外力を決めてソフト対策に取り組むとのことだが、施設計画との関係についてもよく整理し、検討したほうがよい。
- 様々な外力による災害リスクを評価し、その災害リスクが急激に変化（増加）するところを明確にし、対応を検討することが求められる。